

人とまちを活かし、心の豊かさを育む「音楽のまちづくり」へ

市民との協働で取り組む国際チェロコンクール

市民活動推進部学園都市文化課長 富貴澤 繁幸

はじめに

八王子市は、縄文時代の遺跡から人々の暮らしが確認されており、八王子城跡などの史跡も多く残されている。古くから交通の要衝として、また商都として人々が行き交い、まつりや伝統芸能など魅力ある文化が生まれ継承されてきた。これらは本市固有の文化であり、市民の貴重な資産となっている。

また、高尾山を始めとする豊かな自然に恵まれ、都心から約 40 km という地理的な利便性もあり、多くの人々が移り住む一方、周辺丘陵部には多くの大学が進出し、約 11 万人の学生が学ぶ全国でも有数の学園都市を形成している。更に、近年の国際化の進展により、外国人の居住も増え、国際都市としての要素を持つようになってきている。

このように、広大な市域に新旧住民あわせて 56 万人の人々が暮らし、その交流によって新たな文化も生まれ育まれつつある本市は、2006 年 3 月に『八王子市文化振興計画』を策定した。基本理念を「人とまちを活かし、心の豊かさを育む文化のかおるまちづくり」とし、目指すべき理想像を「八王子学の構築と普及」、「文化びとによる文化おこし」、「多文化の共生」と定め、市民が担い手となって文化振興を推進するために、市民と行政の協働体制の構築に取り組んでいる。

本稿では、その実践例として 2006 年 11 月に開催した「ガスパール・カサド国際チェロ・コンクール in 八王子」について、行政の視点から報告する。



市民力で開催したコンクール（本選）

1. 事業の経過～市民活動への行政の参加からコンクール開催まで

（1）行政の参加までの経過

初めて本市に対してコンクール開催への支援要請があったのは、2002 年 1 月のことだった。コンクール開催に向けて活動していた市民グループから、国際チェロコンクール開催についてのポリシーが提出されたのが始まりである。

同グループは、同年 7 月、2005 年のコンクール復活を目指して「国際チェロコンクール市民準備会」を発足した。そして、同年 11 月、市民が八王子で国際チェロコンクールを開催することについて、八王子市長からフィレンツェ市長に対して支援依頼を求めるよう、同準備会から本市に要請があった。市はこれを受け、市長からフィレンツェ市長に宛てメッセージを送った。

2003 年 1 月、再度、同市民準備会から、八王子でのカサド国際チェロコンクール開催への協力を求めるフィレンツェ市長宛の八王子市長親書送付の要請があった。これを受けて、再度市長からフィレンツェ市長に対し、支援依頼の文書を送った。そして同年 3 月、フィレンツェ市長の意向を受けたイタリア音楽評論コンクール協会及びフィレンツェ市立劇場から、八王子市長宛に日本での開催を承諾する文書が届き、同市民準備会はコンクール開催準備に取りかかった。

同年 6 月に、特定非営利活動法人チェロ・コンサートコミュニティ（以下「CCC」）を設立するとともに、広く賛同者を求め、コンクール開催に向け活動を進めた。また、CCC はイタリアとの文書交換を重ね、フィレンツェ市長への名誉会長就任依頼など調整を進めた。

市民準備会からすれば、他国の市長と対等な立場の市長から支援要請を依頼することで、承諾を取りたいという意向があったと思われる。更には、もっと踏み込んだ支援を行政に期待していたのかもしれない。

しかし、当時の市の主な関わりは、CCCがイタリア側とやり取りする文書を、生涯学習部交流課の国際担当が翻訳するのみであり、文化担当所管であった同部推進課や教育委員会社会教育課の関わりは希薄であった。行政として、このコンクール開催企画への支援意識は、非常に低かったと言わざるを得ない。

(2) 行政組織の改正

ここで、この事業に対応する行政組織の改正について述べておく。

市が本格的に同事業に関わるのであれば、文化担当所管である生涯学習部推進課及び教育委員会社会教育課が対応するのが筋であったが、先に述べたように、当初この事業には、市民の国際交流事業支援の立場から市長部局の生涯学習部交流課が主に関わっていた。

2003年8月、同年3月に策定した本市の基本構想・基本計画『八王子ゆめおりプラン』の施策体系に合わせる形で、本市としては十数年ぶりの大きな組織改正が行われた。その目玉として、同プランの基本理念である「市民との協働によるまちづくり」を推進するため、新たに「市民活動推進部」が設置され、生涯学習部推進課から学園都市づくり部門を、同推進課及び教育委員会社会教育課からそれぞれの文化部門を、また、生涯学習部交流課から国際部門を統合して「学園都市文化課」が設置された。

コンクールへの市民の意識や企業の援助の高まりを背景とする中、結果的にこれは国際的な文化事業を市民が企画運営しようとするということにおいて、この上なく理想的な行政組織となったのである。

また、同年12月には、八王子市議会において、CCCからの協力の呼びかけに応える形で、超党派による「八王子市議会音楽愛好議員連盟」が発足し、全市を挙げての支援体制は整った。

(3) 市長の名誉会長への就任

2004年3月、CCCから本市の外郭団体で文化振興に取り組む、財団法人八王子市学園都市文化ふれあい財団（以下「ふれあい財団」）に対して共催願いが提出された。

また、同月にはCCCはコンクール開催に向けた組織委員会の立ち上げを進めている。CCCから八王子市長に対して、組織委員会の「会長」職への就任要請があった。しかし、会長職では、市長の時間的負担、活動への責任負担などが大きくなることなどから、CCCと調整の結果、同年5月、組織委員会「名誉会長」職への就任要請となった。コンクールは八王子市芸術文化会館（いちようホール）での開催であること、芸術文化の向上に寄与するものであること、開催地市長の就任により外務省、文化庁など国や東京都、都内市町村、カサド氏ゆかりのスペイン、イタリア両大使館などへの協力要請の促進が図れること、また、組織委員会での実質的な役割がシンボリックなものであり、市に経済的負担や、実質的な活動を求めているものであったため、市長がフィレンツェ市長とともに名誉会長に就任した。

(4) 実行委員会の設置～市民との協働へ

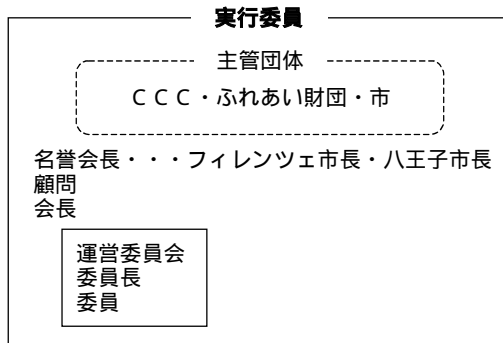
しかし、組織委員会とはいえ、実質的にはCCCが活動していたものであり、組織としては機能していなかった。本市も市長が名誉会長に就任はしたが、行政としては参画してはいなかった。

2004年7月、CCC代表者が逝去され、コンクールの開催が危ぶまれる状況に至った。開催経費を負担していただく冠スポンサーの確定ができない状態も続いていたため、やむなく2005年開催を断念する。そんな中、内々に企業協賛の交渉を進めていた、本市に所在する世界的にも有数の企業であるオリンパス株式会社から協賛内諾の返事を受け、CCCは2006年の開催を決定する。折しも2006年は市制施行90周年に当たり、市議会音楽愛好議員連盟からの依頼も受け、市は90

周年記念事業の位置付けで開催することを決定し、「第1回ガスパール・カサド国際チェロ・コンクール in 八王子」の準備は新たな段階に入ることとなった。

2006年コンクール開催に向けた準備が進むにつれ、運営組織の基盤形成の必要性が生じた。2005年10月、新たに実行委員会を設置し、その中に運営委員会を設置した。フィレンツェ市長、八王子市長が引き続き名誉会長に就任し、CCC、ふれあい財団、市の3団体に加えて、市に関連のある有識者や企業の参画を得て、本格的に開催準備を進めることとなった。これにより、本市としても名実ともに、コンクール開催に向けて歯車が大きく動き出した。

**第1回ガスパール・カサド国際チェロ・コンクールin八王子
実行委員会組織**



コンクールを開催に導いた委員のみなさん

(5) 開催経費の確保

先にも触れたとおり、コンクール開催に伴う経費の確保、特に開催の可否を左右する冠スポンサーの確定は重要な問題であった。

2004年8月、市内の代表的企業であるオリンパス株式会社に対して協賛依頼交渉を始めた。理事長による交渉も行い、2006年4月、オリンパス株式会社から多大な協賛金をいただいた。このことにより、他の企業協賛依頼の活動に弾みがつき、実行委員による様々な企業への協賛依頼活動の結果、5,400万円を超える企業協賛をいただくことができた。これは、ひとえに実行委員の地道な活動の成果である。

本市も企業協賛依頼について、理事長による交渉や、実行委員が協賛依頼活動の際に提示する市長の推薦状を作成するなど、直接、間接の両面から支援を行った。それとともに、2006年度当初予算に初めてコンクール開催にかかる経費を計上し、コンクール開催年に係る経費総額7,879万円のうち、700万円を実行委員会負担金として支出している。

また、ふれあい財団もコンクール開催にかかる経費4,000千円を捻出し支援を行った。

(6) コンクールの開催

コンクール開催まで、CCCは、2003年10月からのチャペルコンサートに始まり、街中でのミニコンサート、学校訪問によるアウトリーチコンサートなど、単にコンクール開催だけに限定せず、広く市民への周知活動を地道に実施してきた。2005年10月、CCC主催によるコンクール前年祭が開催され、コンクール本番に向けたイベントとして重要な役割を果たした。

同年10月の実行委員会の発足以降、事業の実施主体がCCCから行政も参画した実行委員会へと移行し、市民協働による活動が実施された。

2006年1月、全世界へ参加者募集要項を発信し、コンクールの幕は切って落とされた。参加募集締め切り、予備審査、出場者決定を経て、いちょうホールを舞台に、11月23日からの第1予選、第2予選、12月2日の本選、12月3日の表彰式、披露演奏と続いた。

また、11日間に渡るコンクール開催期間中は、関連イベントとしてJR八王子駅北口コンコー

スでのミニコンサートを始め、西放射線ユーロードにおいて地元商店街の協力による「エントランス・ザ・カサド」が、いちょうホールにおいて玉川大学の協力によるカサド展が開催されるとともに、街中はコンクール周知のフラッグがはためき、コンクール一色となった。なお、コンクール周知のフラッグは市役所本庁舎や市施設にも飾られた。



左：パーティにて歓談する出場者、中：市長から第1位入賞者へディプロマの授与、右：コンクール本選の様子

コンクール事業に関して行政の体制に触れておくと、先にも述べたとおり、本格的に国際チェロコンクールを市の事業に取り込んだのは2006年度である。文化担当所管である市民活動推進部学園都市文化課が主管となり、市民活動推進部長が実行委員会に運営委員として参加し、学園都市文化課長ほか同課担当職員10名のうち3名がコンクール事業の担当として業務にあたった。

担当3名は市の文化行政企画の担当として配置されており、コンクール事業のほか、冒頭で述べた「文化振興計画に関する業務」、「ふれあい財団関連事務」、毎年秋に開催する市主催の「市民文化祭関連業務」、市内に設置された「彫刻関連業務」、市の伝統文化に街なかで気軽に触れる機会を創出する「伝統文化ふれあい事業実行委員会事務局業務」など、多岐に渡る文化行政に関する業務を担当している。

コンクール事業で行政が担った業務としては、都内多摩地区全自治体に後援を呼びかけ、結果、26市町村からの承認を受け、コンクールの周知に協力をいただいた。その他、イベント実施にかかる消防署、警察や保健所などへの手続き、市広報やホームページによる市民周知や市政記者へのパブリシティなどを担当した。コンクール期間中は、他の事業の業務をこなしながら、コンクール本番会場での来場者の受付などを担当した。また、「エントランス・ザ・カサド」は、実行委員会の中で市がメイン担当であったため、受付担当業務の合間をぬってイベントの本番準備に走るなど、かなり厳しいスケジュールであった。イベント当日は担当者他、部内、部を超えて他課の職員の応援体制を敷き、約20名の職員が運営にあたった。また、パーティや表彰式、出場者の宿泊施設での受け入れなどでは、同課の国際担当職員と囑託員が通訳として活躍した。また、市に登録している語学ボランティア、国際交流団体や文化団体との連携、町会・自治会、市民活動団体への協力要請なども行った。

2. 事業の特色

(1) 市民企画

元々カサドもチェロも、本市とは直接関係を持たない。では何故このコンクールが日本で、八王子で開催されるに至ったかといえば、まさに八王子市民が企画し、活動し、大きな市民力を発揮したからである。その市民力に行政も動かされたのである。このコンクールは、市民提案型の協働事業であり、企画・運営などで果たした市民の役割は非常に大きなものであった。

今までの日本各地で開催された国際コンクールが、行政や行政出資の外郭団体で企画運営されてきた中で、新たなコンクールのあり方を示したものである。

(2) 市民参画

コンクールの運営面での市民の参画は多岐に渡り、実行委員会、運営委員会事務局を始めとして、多くの市民が手弁当で参加し、まさに市民手づくりのコンクールを実現した。

ボランティアについても、会場支援、出場者支援、広報宣伝、ホームステイ受け入れなど117名の参加をいただいた。

また、サポーター会員(現在の「カサドクラブ」、実行委員会が運営するコンクールオフィシャル会費制の会員制度のこと)による資金面からの支援があった。

ボランティア登録者数

グループ	人数
会場支援グループ	52
出場者支援グループ	24
広報宣伝グループ	7
ホームステイ受け入れ家庭	34
合計	117

(3) 企業等の協力

多額のコンクール開催・運営経費の協賛を始めとし、市内にある財団法人新制作座文化センターによる出場者の滞在受け入れ及びサポート、八王子ホテルニューグランドほかのミニコンサート等の会場提供、商店街の市民周知への協力など、ハード・ソフトの両面から多くの協力をいただいた。

(4) プロデューサーの起用

このコンクールは日本初の国際チェロコンクールであり、市民にも行政にも運営のノウハウがなかったため、コンクールの専門的なマネジメントを担う、経験豊富なプロデューサーを起用した。

特に今回は、既存のコンクールの復活とはいえ、実質的には新規の国際コンクールの立ち上げであったこと、また、市民の企画・運営経費の限界など各種のハードルをクリアしなければならない非常に難しい状況下での運営であったことから、プロデューサーが果たした役割は非常に大きなものである。

3. 事業による効果

(1) 文化振興

本市文化振興計画の中で、市民が文化振興の主役であり担い手「文化びと」であるとしている本市において、「第1回ガスパール・カサド国際チェロ・コンクール in 八王子」が市民の手によって開催されたことは、大変意義深いことである。コンクール運営に携わった人も、観客も文化びとであり、このコンクールによって新しい文化びとが増えていくであろう。文化は、そこに暮らす人々の暮らしや環境、活動の中から生まれるものである。文化びとの力、市民の力が八王子に新しい文化を創り出していくに違いない。事実、今回のコンクールを通して、市民力が八王子のまちづくりに新しい「音楽」というキーワードを導いたのである。

また、コンクール本選の様子がNHKの衛星放送で1時間に渡り放映されるなど、八王子を日本に、そして世界に発信する契機にもなった。

(2) 市民協働

コンクールは、市民、企業、大学、行政などの協働により行われた。大きな市民力に加え、それぞれがパートナーシップに基づき事業に関わったことが、コンクール成功の要因のひとつであろう。まさに協働の体現であり、これからの文化の振興やまちづくりに関して、市民、大学や企業、行政が結びつき、協働体制を構築することの必要性、重要性を示したものである。

(3) 若きチェリスト育成基金の設置

2007年3月、本市は国際チェロコンクールの開催を中心とした若手チェリストの育成を支援するため、コンクール開催後に実行委員会から受けた指定寄付金を原資に、総額900万円で「若きチェリスト育成基金」を設置した。同基金は市民や企業からの指定寄付の受け皿になり、また、次に述べる音楽のまちづくりに対する市の積極的、かつ継続的な取り組み姿勢の表れでもある。

(4) 音楽のまちづくり

コンクール開催を機に、本市において、新たな「音楽」というキーワードを基に、市民がゆとりと潤いのある生活を実感できる「音楽のまちづくり」への取り組みが始まった。身近に、気軽に音楽に親しむことができる環境づくりを進め、文化振興の推進はもとより、地域資源を活用した文化による街の活性化を目指すこととしている。

おわりに

以上、極めて簡略ではあるが、本市の新たな文化事業として誕生した「ガスパール・カサド国際チェロ・コンクール in 八王子」について述べてきた。最後に、これからの展望に触れておきたい。

一番の課題は、コンクールの継続開催及び開催資金の確保である。そのほか、開催年次以外の年の事業展開及び運営資金の確保、市民参画の推進、市民への周知・定着及び支援会員の獲得など、多くの課題を抱えている。

本市は、コンクール終了後も実行委員会に参画し、3年後の2009年第2回コンクール開催に向け、課題に取り組んでいる。

今後は、コンクールを音楽のまちづくりの核と捉え、人とまちを活かし、心の豊かさを育む音楽のまち八王子の実現を目指し、市民との協働により、更なる八王子の文化振興の推進を図っていく。

(ふきざわ しげゆき)